

『風と共に去りぬ』で風と共に去らぬ物

佐々木 吉 範

「猛き者も遂にはほろびぬ、ひとへに風の前の塵に同じ」（平家物語）とおなじように、この『風と共に去りぬ』という作品は、南部の高貴な生活の崩壊と主人公であるスカーレットの身の回りの崩壊に際する出来事を風に例えて表現しているのではないだろうか。スカーレットが生まれ育ったタラという土地を除いては彼女の身の回りには何も残らなかったのである。そしてその様々な物をのみ込んでしまった風はスカーレットの元では一度ならず二度三度吹いているのではないだろうか。その風によってスカーレットという人物が一回りも二回りも大きく成長していったのである。そしてその困難にぶつかるとつれ、まず自分というものがどんな人間であり、そして自分が一番大切なものは何なのかがわかってきたのである。つまり「風」によって今まで見てきた夢が覚めたのである。

まず最初に吹いた「風」は戦争である。南北戦争によって南部のほとんどの人間が被害を受け、それまでの上流階級はすべて崩れ去ってしまった。豊かでおごりがあり、奴隷のいる生活はなくなり、おごりと誇りだけが残ってしまったので、南部の再建は困難なものがあった。スカーレットもその例外ではなかった。今までの自分の身の回りのもの全てが奪われ、かろうじて自分の家が残っただけであった。つまり彼女が後に自分が一番大切だと思うタラの土地である。「風」によって全てが失われたが唯一タラだけが残るがこの時彼女はまだそのタラ存在を重要視していなかった。

彼女の親友であり義理の妹であるメラニーが命を落とした時に、次の「風」が吹いたのである。そしてこの時彼女の夢は全て覚めたのである。スカーレットは初めはメラニーの夫であるアシュレを好いていた。しかし自分はレットと結婚し不満をもちながらもうまく暮らしていた。しかしメラニーの死後、彼女はアシュレよりも実はレットの事を愛していたのだと気づいた。しかしその時レットのスカーレットを想う気持ちは冷めていた。そうしてスカーレットは一人ぼっちにされてしまったのである。しかしその時スカーレットの身の回りや頼りにしていたものも全て失ってしまい、それでも残ったものがある。それがタラである。この時彼女は自分の一番大切なものにはじめて気づく。父親も愛したその土地の存在を母親と同じくらい愛し、慕ってきたことに自分にはじめて気づくのである。何が起きても、全てが消え去り、ちりになって風に吹きとばされても土地だけは、根強く残ることを改めて知ったのである。

（指導教員 中村 敦志）